

[論文]

卒業文集『青い芽』における中学生の表現をめぐる一考察 —「転換期」の多磨全生園における隔離の相対化への試み—

西浦 直子（国立ハンセン病資料館）

はじめに 研究史の整理と課題の限定

1953年、国立療養所多磨全生園に入所していた学齢児童が通う全生学園が、東村山町立化成小学校、及び同町立東村山中学校の全生分教室として認可された。本稿は、全生分教室の中学生の作文や詩、版画などを収録した卒業文集『青い芽』（1958年創刊、1979年終刊）における表現をめぐる考察である⁽¹⁾。

ハンセン病療養所における子どもと教育については、教育学や歴史学の分野で、清水寛⁽²⁾や江連恭弘⁽³⁾、佐久間建⁽⁴⁾らによって、隔離政策下に患者児童の発達の権利・学ぶ権利が侵害された実態の解明が進められてきた。これに対し、法制度及び患者運動との関連に着目する宇内一文によって、戦後ハンセン病療養所における学校教育、特に邑久高校新良田教室における学校民主化運動を対象とする研究もなされてきた⁽⁵⁾。

一方、教育心理学の分野では、ハンセン病によるスティグマと喪失体験について検討した播磨俊子が、社会復帰による自己実現を目指す10代の女性像に言及している⁽⁶⁾。

1950年代から1960年代にかけての日本では、ハンセン病隔離政策が継続される一方、化学療法の

実施や高度経済成長を背景に、回復した若い人びとの社会復帰が激増した。これによって、それまで療養所を支えていた患者作業の担い手不足や、療養所内の経済格差が顕著になるなどの変化が起こり、療養所の「転換期」が叫ばれるようになった⁽⁷⁾。ハンセン病療養所の児童文芸を蒐集した能登恵美子は、この時代の子どもの表現について「プロミン以後の子供達の作品に、力づよいものが多くなるのは当然のことであろう。初めて園の外の生活を現実の「夢」として語ることが出来るようになったのである。」⁽⁸⁾としている。

本稿ではこれらをふまえ、隔離と社会復帰とはざまに置かれた子どもたち、特に療養所の「転換期」に、退園を含む進路を選択した中学生が、何をどのようにとらえ、表現したかを検討する。資料として、多磨全生園の中学生が制作した卒業文集『青い芽』に掲載された、テキスト及び版画をとりあげる。東京都下に位置する多磨全生園の立地は、交通の便の良さや貸し部屋の多さ、匿名で就職できる就職先の豊富さなど、当時ハンセン病回復者が社会復帰する際に必要であった条件を備えていた。そのため「転換期」の問題が先鋭的に表れた療養所であり、同園で編まれた『青い芽』

(1) 1960年4月より東村山町立東村山第二中学校、1964年4月より市制公布に伴い東村山市立東村山第二中学校。

(2) 清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『1997年度埼玉大学教育学部「障害児教育史演習」報告集 ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 ―国立療養所多磨全生園を中心に― 第1集』（1999年）、清水寛編著『ハンセン病児問題史研究 国に隔離された子ら』（新日本出版社、2016年）。後者は、前者に所収された聞き取り調査の再録や、加筆修正を加えた論考を含む。

(3) 江連恭弘「第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（2）第1 教育界」（『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』財団法人日弁連法務研究財団 ハンセン病問題に関する検証会議、2005年）、同「解説」（江連恭弘編・解説『近代日本ハンセン病問題資料集成 補巻10 ハンセン病と教育』不二出版、2006年）など。

(4) 佐久間建「近現代日本ハンセン病史における「子ども」と「教師」―「負の経験」をこれからの人権教育に生かすために」（上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文、2007年）、同『ハンセン病と教育 ―負の歴史を人権教育にどういするか』（人間と歴史社、2014年）。

(5) 宇内一文「ハンセン病患者のための高等学校における校内民主化運動に関する研究―「隔離教育」から「民主教育」への転換に注目して―」（『ハンセン病市民学会年報2006 特集／第2回交流集会記録』ハンセン病市民学会、2006年）、「ハンセン病患者のための高等学校における修学旅行獲得運動に関する教育学的研究」（『中等教育史研究』第16号、中等教育史研究会、2009年4月）など。戦後のハンセン病療養所における学校教育については、前掲、江連恭弘「解説」も参照。

(6) 平成17年度・平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書・課題番号17530507「元ハンセン病患者のスティグマと喪失体験に関する研究」（研究代表者播磨俊子、神戸大学大学院人間発達環境学研究科、2008年）。

(7) 社会復帰者の増加とその背景については拙稿「らい療養所からの青年たちの「社会復帰」をめぐる―1950-1970 日本―」（国立ハンセン病資料館『国立ハンセン病資料館研究紀要』第4号、2013年）22-34頁、退園した青年たちの経験については国立ハンセン病資料館2012年度春季企画展図録『青年たちの「社会復帰」―1950-1970―』（国立ハンセン病資料館、2012年）16-57頁などを参照。

(8) 能登恵美子「隔離の園の子供たち―ハンセン病患者児童の作品を読む」（『射こまれた矢 能登恵美子遺稿集』皓星社、2012年、111-112頁、2021年発行の『増補版 射こまれた矢 能登恵美子遺稿集』においては94-95頁）。初出は井上光晴の個人誌『兄弟』第2号、1989年10月。

は、「転換期」における中学生の表現の特徴を検討するのに好適といえる。

『青い芽』のテキストを分析した前田博行「文集『青い芽』から」⁽⁹⁾では、掲載された作文などの主題として、家族との別離の衝撃、ハンセン病の苦しみ、児童数の少なさ、体系的指導の困難や派遣教師による差別的な取り扱い等をあげているが、中学生の進路や療養所の変化との関わりでの検討は行われていない。また『青い芽』については、1955年から化成小学校の全生分教室で発行された文集『なかよし』⁽¹⁰⁾と合わせて、1934年に第一区府県立全生病院にて創刊された児童文芸誌『呼子鳥』⁽¹¹⁾との比較検討の必要も指摘されている⁽¹²⁾。本稿はこうした課題に接近する一考察でもある。

『青い芽』は国立ハンセン病資料館に全号が収蔵されているが、本稿では紙幅の都合で「転換期」との関係に焦点を絞り、社会復帰者数がピークを迎えた1960年前後の『青い芽』に掲載された作文と詩、並びに木版画を対象として分析する。

『青い芽』には、第4号から第14号までに大量の木版画が掲載されている⁽¹³⁾。1940年代後半から1950年代には版画運動が再興されて全国に広がり⁽¹⁴⁾、小中学校においても、全国各地で教育版画への取り組みが盛んになった⁽¹⁵⁾。そこで広く作ら

れたのは版画と、作文や詩から構成される画文集で⁽¹⁶⁾、『青い芽』の構成とも共通し、分教室の教育が質的に同時代の教育方針と呼応していたことを示している⁽¹⁷⁾。一方、戦後日本の教育版画は生活綴方運動と結びつき、文集の表紙・挿画の役目を果たしたとされているが⁽¹⁸⁾、『青い芽』の版画の主題は、作文や詩の内容と直接関わりのないものが多く、その独自の意味についても検討が必要である。これについて本稿では、テキストとの関係、版画の独自性の双方に留意しながら、1960年代前半までに制作された版画について検討する。

この時代の子どもの多くは回復後に療養所を離れ、成長してからも病歴を残すことを避けてきた／避けている状況があるため、個人情報に関する言及は避け、作者名はイニシャルで表記する。また、子どもの文芸が執筆及び発表される際には、補助教師、派遣教師らによる指導もしくは編集があり、発表されたテキストは必ずしも子どもの実態を示すものではない可能性があるため、ここでの検討は表現された内容に限定する。なおこれらの作文や詩、子どもたちの状況をめぐっては、多磨全生園の小学校分教室の派遣教師を務めた鈴木敏子の著作⁽¹⁹⁾、補助教師を務めた藤田四郎が氷上恵介のペンネームで記した「感傷旅行」⁽²⁰⁾、少女寮寮母であった渡辺たつ子が津田せつ子のペン

(9) 前田博行「文集『青い芽』から」(前掲、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 ―国立療養所多磨全生園を中心に― 第1集』)。

(10) 1955年、東村山市立化成小学校全生分教室の卒業文集として創刊。分教室が閉鎖される1976年3月、第21号を以て終刊。

(11) 1934年4月創刊。発行所は全生学園。1937年8月、第13号を発行した後休刊し、後に『山櫻』第29巻第1号、1948年1月号に「児童作文」が掲載され、同年7月にはこの欄の名称が「呼子鳥」となる。『呼子鳥』については、篠崎恵昭・清水寛「多磨全生園の文集『呼子鳥』にみる病児たちの意識」(前掲、清水寛編著『ハンセン病児問題史研究 国に隔離された子ら』)を参照。

(12) 前掲、篠崎恵昭・清水寛「多磨全生園の文集『呼子鳥』にみる病児たちの意識」156頁。

(13) これらの木版画は、国立ハンセン病資料館企画展『「青い芽」の版画展―多磨全生園の中学生が彫った「日常」の風景』にて、計108点を展示した(会期:2021年3月2日-同6月10日 会場:国立ハンセン病資料館企画展示室)。

(14) 同時代の版画運動については友常勉「版画運動とサークル―北関東版画運動を中心に」(宇野田尚哉、川口隆行、坂口博、鳥羽耕史、中谷いずみ、道場親信編『サークルの時代』を読む 戦後文化運動研究への招待)影書房、2016年)を参照。

(15) 各地の取り組みについては、1952年から1996年まで、戦後日本の教育版画運動を牽引した大田耕士が中心となって教育版画の普及を目的に発行した『はなが』(日本教育版画協会編・発行)を参照。大田が蒐集した版画集を多数所蔵する石川県羽咋郡志賀町立図書館では、『はなが』の目録を発行しており、その全貌をうかがうことができる(志賀町立図書館子ども版画教育叢書-1『日本教育版画協会発行「はなが」誌目録」石川県羽咋郡志賀町図書館、1999年)。

(16) 佐藤守弘「第6章 綴ることと彫ること―『北白川こども風土記』の視覚」(菊池暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ―『北白川こども風土記』から―』(小さ子社、2020年)、338-339頁)。

(17) この点について、原爆の図丸木美術館学芸員の岡村幸宣氏、町田市立国際版画美術館学芸員の町村悠香氏よりご教示をいただいた。

(18) 前掲、佐藤守弘「第6章 綴ることと彫ること―『北白川こども風土記』の視覚」338-339頁。

(19) 鈴木敏子『らい学級の記録』(明治図書、1963年)、同『書かれなくともよかった記録 ―「らい病」だった子らとの十六年―』(鈴木敏子、2000年)、同『「らい学級の記録」再考』(学文社、2004年)。鈴木は中学校の児童についての記録も多く書き残している。

(20) 氷上恵介「感傷旅行」(同『オリオンの哀しみ』氷上恵介遺稿集出版委員会、1985年初版、1995年第3版)。原文は同『感傷旅行』として1979年7月から逝去直前の1984年1月まで多磨全生園の機関誌『多磨』に連載された。『オリオンの哀しみ』の「あとがき」(若宮喬)によれば、再録にあたり出版委員会にて若干の整理を行っている。

ネームで残した随筆⁽²¹⁾など、おとなから見た記録も多数残されているが、子どもの作品とこれらの記述との総合的な分析については機会を改めて行いたい。

以下、第1章では、全生分教室と、多磨全生園における児童文芸及び『青い芽』の概要を示す。第2章では『青い芽』第1号から第3号の作文・詩、第3章では第4号から第7号の作文・詩を中心に、それぞれの特徴を検討し、第4章では版画による表現について、1960年代前半の特徴を述べる。これらを通して、終章で「転換期」における中学生の表現の特徴について考察する⁽²²⁾。

1. 全生分教室と『青い芽』の概要

(1) 全生分教室の概要⁽²³⁾

1910年、第一区府県立全生病院(現 多磨全生園)の礼拝堂で、療養所生活に必要な読み書きなどの習得をさせるため、患者が教師となって児童らを教えるいわゆる「寺子屋式」の授業が始まった。1920年代後半からは、入所者の間で文芸が盛んになったことを受けて、児童教育にもエスペラントの授業や作文指導が導入された。1931年には、収容強化による児童数増加への対応として、療養所外の義務教育に形式上準じた初等教育の場として全生学園が建設され、その後太平洋戦争下の一時

閉鎖を経て1947年に六三制に再編された⁽²⁴⁾。

全生学園の中学校が分教室として認可され、初代の派遣教師大野玉江が着任したのは1953年12月である⁽²⁵⁾。認可翌年(1954年)に更新築された校舎⁽²⁶⁾は、東側を中学校、西側を小学校としていた。1955年秋、建物の南東側にある正面玄関を撮影した写真には、小中学校両方の校名を掲げた看板が見える【写真①】。



写真① 分教室校舎の正面玄関 1955年

本校から分教室に派遣されてくる教師は、1966年までは小中学校に各1名で、いずれも複式学級で運営された。派遣教師は白衣を着用し、場合によっては貨幣を消毒するなどの行為があったほか⁽²⁷⁾、本校による成績評価において、分教室の生

- (21) 津田せつ子が少女寮寮母としての思いを綴った随筆は、1960年代から1970年代の多磨全生園の機関誌『多磨』に断続的に投稿され、津田せつ子『随筆集 曼殊沙華』(渡辺立子、1981年)、津田せつ子『病みつづあれば』(けやき出版、1998年)に収録されている。
- (22) 全生分教室、分教室の語は、注記のない場合は多磨全生園内の中学校を指す。また『青い芽』の引用に関しては誌名と発行者の表記を省略する。[] 内は筆者による注記である。図版は全て国立ハンセン病資料館所蔵である。
- (23) 第一区府県立全生病院及び国立療養所多磨全生園における児童の生活と教育の変遷については、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』(一光社、1979年) 55-57頁「寺子屋」、110-112頁「少女少女たちの世界」、190-191頁「邑久高校新良田教室」、208-212頁「分教室と少年少女舎」、及び前掲、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 一国立療養所多磨全生園を中心に一 第1集』、拙稿「ある隔離された子どもたちの歴史—多磨全生園の中の生活と学校—」(東村山ふるさと歴史館編『東村山市史研究』第15号、2006年)等を参照。
- (24) 中学部の初代卒業生だった冬敏之は、1950年の卒業式で東村山町立東村山中学校の卒業証書を授与されたという(冬敏之「そこにも愛はあった—暗い少年時代を回顧して—」前掲、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 一国立療養所多磨全生園を中心に一 第1集』206頁)。当時全生学園は町立中学校の分教室として認可されておらず、証書の効力はなかったであろうが、中学校の卒業証書を授与しようとした入所者(当時は患者教師のみであった)がいたことを示す。
- (25) 前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』「年表」71頁。分教室の法的な設置根拠は、1953年に成立した「らい予防法」第三章「国立療養所(入所患者の教育)」第十四条である。同条では「国立療養所の長(以下「所長」という。)は、学校教育法(昭和二十二年法律第二十六号)第七十五条第二項の規定により、小学校又は中学校が、入所患者のため、教員を派遣して教育を行う場合には、政令の定めるところにより、入所患者がその教育を受けるために必要な措置を講じなければならない。」としている。「学校教育法」第75条では「小学校、中学校及び高等学校には、左の各号の一に該当する児童及び生徒のために、特殊学級を置くことができる。[各号略]」としたうえで、「二 前項に掲げる学校は、疾病により療養中の児童及び生徒に対して、特殊学級を設け、又は教員を派遣して、教育を行うことができる。」と定め、これに基づき多磨全生園長が設置し本校が教師を派遣する形で分教室が設置されることになった。多磨全生園の分教室認可は各療養所に比して遅い時期にあたる。公立の学校として最も早い認可は大島青松園の大島学園である(1932年、国民学校養護学校として認可)。各療養所の分教室設置の時期については前掲、江連恭弘「解説」の年表も参照。
- (26) 『昭和29年報』国立療養所多磨全生園、1955年8月、35頁「6. 教育」。
- (27) 「療養所多磨全生園での入園児童・生徒の教育について一元全生学園教師・野上寛次さんの講話を中心にして一」(前掲、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 一国立療養所多磨全生園を中心に一 第1集』) 114頁。

徒が不利な扱いを受けることもあった⁽²⁸⁾。派遣教師だけでは授業や学級運営が成り立たないため、認可前に引き続き、入所者が補助教師として着任した⁽²⁹⁾。また、公教育の場として認可されながら、教材費の面で本校と同等の措置を受けられなかったため、派遣教師や補助教師がたびたび多磨全生園の事務部長や事務分館長らと交渉していたが、交渉窓口である療養所側は「厚生省は施設を提供し、教育は文部省でやる」という奥の手を出す⁽³⁰⁾といった有様で、1960年代前半までは教材や備品、暖房設備などの不足が常態化していた。

また多磨全生園の患者自治会（現 入所者自治会）も「分教室の主体は園当局にある」として積極的な支援は行わなかった⁽³¹⁾。その背景には、当時自治会運営が困難に直面していた事情がある。自治会運営を担ってきた世代が高齢化する一方で、若く軽症の人びとは社会復帰を目指し、職業訓練や退園の資金作りのために、自治会運営や患者作業に関わらなくなっていた。社会復帰者や労務外出者の増加は、患者作業従事者、とりわけ付添看護・介護の担い手の減少を招き、高齢で不自由度の高い人びとの生活を直撃した⁽³²⁾。社会復帰する人と、重い後遺症を持つ人、両者の中間の、比較的軽症で回復したが社会復帰を望めない人、といった階層分化が顕著になり⁽³³⁾、さらに労務外出の収入と所内作業賃との格差、療養慰安金や年金の支給に関する格差が問題視され、自治会への信頼と関心が薄れていった⁽³⁴⁾。このように、分教室認可から当面の間は、自治会も「転換期」における変化に直面しており、相対的に軽症で、かつ自治会での発言権を持たない子どもの教育環境の改善に、積極的に介入することはなかった。

1955年から少年舎の寮父を務めた三木義夫は、この状況に次のような苦言を呈している。

派遣教官は、小、中に一名で、他は入園者が手助けをしているのが現状であるが、適当な人がいてもすぐに退院したりして、先生の新陳代謝が激しい。それだけに派遣教師、残された入園者の先生は大変な苦勞をしておられる。[中略] 子供の教育は当事者だけで済まされるものではないと思う。人数の少ない子供たちを、多数の大人たちで心配することはないと言う安易な考えを捨てて、子供たちの一生を決定するかもしれない小、中教育を考えて欲しいと思う。

（三木義夫「寮父としての希望」）⁽³⁵⁾

補助教師の仕事は、授業とその準備に加え、予算獲得交渉や子どもたちの生活支援など、多岐にわたっていた。体力のある、相対的に軽症で若い入所者が務めることが多かったが、それらの条件がある人は社会復帰を目指す場合も多く、退園やその準備のために教師を辞めることも少なくなかった。三木は多数のおとなたち、即ち自治会がこうした状況を放置していることへの苛立ちを露わにしている。

また分教室の補助教師であった龍無二志は、1961年の『多磨』誌上で「自分の任務を忠実に果そうとすればするほど分教室内だけでは解決出来ない問題に遭遇するのである [中略] 望郷台にでも上って、「一入所患者であるおれに教育の責任があるのか？」と大声で怒鳴りたくなる」「内々は弱音を吐いているのだが外には出せない。外に

(28) 天野秋一「小・中学校分教室の補助教師としての体験」(前掲、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもの生活・教育・人権の歴史 一国立療養所多磨全生園を中心に一 第1集』) 118頁。

(29) 1940年代に学園教師を務めた野上寛次は、多磨全生園の学校教育について、患者教師・補助教師の働きによるところが大きいとしている。前掲「療養所多磨全生園での入園児童・生徒の教育について一元全生学園教師・野上寛次さんの講話を中心に」114頁。

(30) 龍無二志「分教室の悩み」(『多磨』第42巻第8号、1961年8月) 6頁。

(31) 同上、6-8頁。

(32) 前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』221-224頁「不自由看護切り替え」。

(33) 野谷寛三「らい療養者の階層について」(『多磨』第41巻第5号、1960年5月)、全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協運動史 ハンセン氏病患者のたたかひの記録』(一光社、1977年) 134-147頁「各階層の問題と運動」など。

(34) 前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』237-238頁「自治会閉鎖」。

(35) 三木義夫「寮父としての希望」(『多磨』第45巻第1号、1964年1月) 24頁。三木は1955年から1979年まで若竹舎(少年寮)寮父。

出しても誰も分教室を助けてくれはしないからだ」⁽³⁶⁾と、分教室への理解や支援が乏しい現状を批判している。子どもたちの処遇も自らが働く環境も、教師自身が交渉しなければ改善の見通しは立たず、交渉そのものも教師たちにとって大きな負担になっていた⁽³⁷⁾。そして教師が交渉に時間を割かれると授業がなくなるといった形で、子どもたちに問題が転嫁されることも珍しくなかった。

1960年代半ばには園内の児童数が激減し、小中学校分教室の存続が危ぶまれる事態となった。全国的にも新患者数・新規入所者数の減少によって分教室が次々と閉校していった。多磨全生園患者自治会はこうした状況を受けて、学齢期の入所者に教育の場を確保するため、東村山市に分教室の維持を働きかけた。1965年12月には「入所児童に対する奨学助成金給与等」の請願書を東村山市議会に提出、市教育委員会にも陳情を行い、市内で開催された市民教育大行進には多磨全生園から約30人が参加した⁽³⁸⁾。翌1966年4月以降、全国各地から学齢期の入所者が次々と全生分教室に入学してきた⁽³⁹⁾。多磨全生園患者自治会は派遣教師の増員要求を行い、1966年9月からは派遣教師が小中学校各1名ずつ増員され⁽⁴⁰⁾、教材費や課外活動費も増額となり、分教室の運営はようやく安定していった。その後、児童数の減少により、1976年3月に青葉小学校全生分教室が休校、1979年3月に

東村山第二中学校分教室が休校（いずれも事実上の閉校）を迎えた。

（2）多磨全生園における児童文芸と『青い芽』の概要

ここで多磨全生園における児童文芸について見ておきたい。子どもたちの文芸は、全生学園が分教室認可を受ける以前から盛んに奨励されていた。先述のとおり1934年4月から児童文芸誌『呼子鳥』が発行され⁽⁴¹⁾、入所者が文芸雑誌として立ち上げた『山櫻』⁽⁴²⁾にも子どもの作文や詩が掲載された。文学に自らの存在意義を求めたおとなたちは、子どもたちにも文章表現による人格陶冶を求めたようで、学校だけでなく寮でも作文を書かせた⁽⁴³⁾。時には、作者に無断で作品に編集を加え、自治会機関誌に掲載することもあった⁽⁴⁴⁾。子どもたちには、作文は書かされるもの、苦手なものという認識もあったようだが⁽⁴⁵⁾、療養所という限られた環境で過ごす中で、文章を書くことは選択しうる数少ない表現の手段でもあった⁽⁴⁶⁾。

おとなたちの文学は、敗戦と日本国憲法の成立、プロミンの登場とらい予防法闘争によって変貌を遂げた。療養所の文学は社会にその視野を開いてゆき、歌集『陸の中の鳥』や生活記録『深い淵から』、詩話サークルの発行物などには、その後の患者運動に連なる批判的な視点による作品が盛ん

(36) 前掲、龍無二志「分教室の悩み」4-5頁。鈴木敏子は教師を療養所入所者が務めることの難しさを次のように指摘している。「若い、先生をやれそうな人は、退園準備で学校になぞ目もくれぬ。それに、「先生」と呼ばれる身になると、日常生活の面でもいろいろと制約をうける。言行を慎まねばならなくなってくる。そういう点でも、先生になり手が少なくなっている。講師だけ別に同じ部屋にいてもらうようにすれば、同室の相手への気がねもなく勉強できる。中学ともなると予習せずには教えられないし、夜学校へ来て勉強するような状態になっている。」（前掲、鈴木敏子「『らい学級の記録』再考」）32頁。

(37) 事務本館や分館との交渉が重い負担になっていた点については、前掲、龍無二志「分教室の悩み」のほか、前掲、鈴木敏子「『らい学級の記録』、同『『らい学級の記録』再考』、同『書かれなくともよかった記録——「らい病」だった子らとの十六年——』にしばしば記述されている。

(38) 前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』、「年表」91頁より。なお、同書210頁ならびに補助教師の藤田四郎がまとめた東村山市立東村山第二中学校・東村山市教育委員会『分教室のあゆみ』（1979年3月）には同年10月とされている。

(39) 前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』によれば、1966年から1967年にかけて全国各地から新たにハンセン病と診断された児童が集まり、その出身地は青森、秋田、山形、茨城、東京、大阪、山口、長崎と全国に及んだ（210頁）。

(40) 前掲、天野秋一「小・中学校分教室の補助教師としての体験」117頁、前掲『俱会一処』210頁。

(41) 編集兼発行人林芳信、発行所全生学園。『呼子鳥』については前掲、篠崎恵昭・清水寛「多磨全生園の文芸『呼子鳥』にみる病児たちの意識」参照。なお、多磨全生園に限らず各療養所で児童作品集が編まれている。『望ヶ丘の子供たち』（編纂者代表長島愛生園長光田健輔、1941年）、『南風』（星塚敬愛園慰安会、1958年）など。

(42) 1919年4月創刊、発行所は山櫻倶楽部。1952年11月より『多磨』に改称。

(43) 比良野「松本さんのこと」（第5号、1962年）。「松本さん」は1940年代前半に少年舎（藤蔭寮）の寮父を務めた松本馨。

(44) 1953年に園内の中学校分教室に在籍したSさんは、作文を大量に、頻繁に書かされたこと、それらを補助教師らが添削し、『山櫻』に「勝手に」掲載したと回想している（2021年3月、国立ハンセン病資料館にて聞き取り）。

(45) 『青い芽』にも、卒業すれば苦手な作文を書かなくてよくなると記した作品がある（H.Y.（3年）「卒業」第2号、1959年）。

(46) 他療養所の事例であるが、1人の子どもによる作文集として松山くに『春を待つ心』（尾崎書房、1950年）がある。

に取り上げられるようになった⁽⁴⁷⁾。これらの活動に参加していた、光岡良二（厚木観）、藤田四郎（氷上恵介）ら執筆者、『山櫻』出版部でその編集・発行に携わった龍無二志、天野秋一らは長く全生学園および分教室の教師を務めていたから、療養所の文学がはらむ社会批判や戦後の患者運動に連なる革新的な空気は、子どもたちにも影響を与えただろう。また作文指導は派遣教師によっても熱心に取り組まれた。特に1960年に小学校分教室の担任に就いた鈴木敏子は綴方教育に傾倒し、盛んに作文を書かせた⁽⁴⁸⁾。

こうした背景のもと、1958年3月、全生分教室にて中学校の卒業文集『青い芽』が創刊された。誌名はある少女の発案であり⁽⁴⁹⁾、奥付に記された編集・発行者名は創刊号が分教室生徒会、ほかはすべて全生分教室である。1966年までは毎年発行され、その後ブランクを挟みながら、1979年までに全15号を発行した【表①】。作者数については、同一人物が漢字や氏名の一部を変えて記名したと思われるケースもあり、正確な把握は難しいが、60人前後が執筆したと考えられる。

執筆の形態は主として作文や詩で、題材には分教室や少年少女舎での生活、療養所内のできごとやそれへの意見、故郷のこと、将来像などが取り上げられている。先にみたように1960年代中頃を境に分教室の環境は大きく変化するが、それと重なり合うように、その書きぶりや題材にも変化が見られ、1960年代半ば以降は修学旅行の紀行文、運動会など学校行事についての作文、日記などが中心となる。なお派遣教師や補助教師からも多くの号に原稿が寄せられている。

また『青い芽』には、既述のように、第4号（1961年）より、第11号・第15号を除く各号に木版画が掲載されている。作品数は文集の表紙や中表紙などを含めると111点にのぼり、中には第6号のよ

表① 『青い芽』発行年・発行者一覧

号数	発行年月	発行者名
第1号*	1958年3月	東村山町立中学校全生分教室生徒会
第2号*	1959年3月	東村山町立中学校全生分教室
第3号*	1960年3月	東村山町立中学校全生分教室
第4号	1961年3月	東村山町立第二中学校全生分教室
第5号	1962年3月	東村山町立第二中学校全生分教室
第6号	1963年2月	東村山町立第二中学校全生分教室
第7号	1964年3月	東村山町立第二中学校全生分教室
第8号	1965年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第9号	1966年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第10号	1969年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第11号*	1971年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第12号	1972年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第13号	1973年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第14号	1975年3月	東村山市立第二中学校全生分教室
第15号*	1979年3月	東村山市立第二中学校全生分教室

*は版画の掲載がない号

※1 1953年認可当時は東村山町立東村山中学校、1960年4月より東村山町立東村山第二中学校、1964年4月より東村山市立東村山第二中学校の分教室

※2 すべて館蔵

うに版画が大半のページを占めている号もある。版画のモチーフは第7号（1965年）までは分教室や少年少女寮、患者作業の様子など所内の風景や生活点描がほとんどで、その後徐々に社会見学⁽⁵⁰⁾や修学旅行など療養所の外での出来事が登場し、1970年代以降は社会見学もしくは修学旅行で目にした印象的な風景と、自画像との組み合わせが中心になってゆく。

2. 1950年代後半の作文と詩をめぐって

次に、1950年代後半に執筆されたテキストを掲載した、第1号（1958年3月）から第3号（1960年3月）をみていこう。創刊号である第1号の表紙は、幾何学模様を印刷した厚紙を継ぎ合わせたもので、綴紐としてピンク色と水色の化繊のリボ

(47) 全国国立療養所ハンゼン氏病患者協議会編『陸の中の島』（新興出版社、1956年）、堀田善衛、永丘智郎『深い淵から ハンゼン氏病患者生活記録』（新評論社、1956年）。前者ならびに同時代の詩サークルの意義については、木村哲也「多磨全生園における詩サークルの活動と歴史的意義—詩誌『猿』『灯泥』『石器』を中心として—」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第8号、国立ハンセン病資料館、2021年）、同「戦後ハンセン病療養所の短歌活動—合同歌集『陸の中の島』を中心に」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第9号、国立ハンセン病資料館、2022年）を参照。

(48) 鈴木敏子の著作の大部分は、子どもの作文の引用とその解説で占められている。前掲、鈴木敏子『らい学級の記録』、同『書かれなくともよかった記録—「らい病」だった子らとの十六年—』。

(49) 前掲、氷上恵介「感傷旅行」（同『オリオンの哀しみ』）206頁。

(50) 号もしくは執筆者によって、社会見学と社会科見学の双方の記載がみられる。社会見学という表記は、療養所内の児童によってその外にある社会を見るという意味で使われたのかもしれない。

ンを用いている。表紙の誌名は手書きでレタリングされており、1冊ずつ手作りしたことがわかる【図①】。続く第2号、第3号は、カットを印刷したり、あらかじめ模様を付けた厚紙を表紙に用いてホチキス製本している。第3号までには木版画は掲載されず、作文や詩とカットで構成されている。



図①
『青い芽』第1号表紙

第1号は中学生たちがガリ切りから製本まで行ったものらしい。詩、作文、研究レポート、見学記など多彩な28篇（教師によるものを除く）を収録し、編集後記には「文芸委員」の肩書と共に3人の児童の氏名が記され、発行者は東村山中学校全生分教室生徒会とされている。ただし、作業場レポートなどでは直接分教室に関わりのない入所者にも協力を求めている、編集には教師、少なくとも補助教師の手が入っていたと考えられる。

第2号以降の発行者は全生分教室で、編集後記には教師の名が記載されている。特に第2号、第3号には、本校校長による学級目標や派遣教師の年度総括のほか、分館長及び患者自治会長の挨拶文が掲載され、第1号には見られなかった、分教室関係者のおとなへの配慮を盛り込んだ構成となっている。第2号発行時の派遣教師であった鈴木辰博は、担任挨拶で「この文集は、生徒と教師全員による作品」と述べている⁽⁵¹⁾。子どもたちのテキストとして、卒業生の抱負、各学年生徒の作文・詩があり、最後に補助教師らのコラムがある。

これら第3号までに掲載された中学生のテキストの特徴としては、(1)退園への自覚、(2)多磨全生園のおとなたちとの齟齬、が挙げられる。

(1) 退園への自覚

作文や詩の題材は、天候や勉強、若竹舎（少年寮）や百合舎（少女寮）のようす、イベントなど、ほとんどが園内の事象である。ただし、子どもたちはすでに療養所外の情報に日常的に接しており、「日曜日はテレビ映画が一番の楽しみ」⁽⁵²⁾という声もある。当時の多磨全生園では週1～2回、公会堂等で映画の上映会を開いており、1958年12月に寄贈されたばかりのテレビ⁽⁵³⁾も観られていたのだろう。

園外の情報を得、また療養所から退園してゆく青年を見送る中で、作文や詩に表される中学生たちの将来像はすでに療養所の外に描かれている。

わたしの希望
それは
一日も早く退院することだ。
心の中に巣くっていて
いつも私をゆさぶって来たねがい
どんなに嬉しいか
おそらく私以外にはわかるまい。
私は退院するのだ
卒業したら。

(C.M.「退院」第2号)⁽⁵⁴⁾

現在の中学生は、中学を卒業してから退園する人、一年くらいこの中で仕事を身につけてから退園する人などいろいろのようです。僕は卒業してから一年間この中の作業場で働いて、仕事を少し身につけてから退園しようと思っています。二、三人は愛生園の高校を志望している人もいますが、やはり退園希望が一番多いようです。

僕の父なども面会に来てくれたとき、
「少年・少女舎に居る人はみな退園出来る人ばかりだなあー」
と、言っています。

この病気にもとうとう暁がきたのだと信じ

(51) 鈴木辰博「昭和三十三年度を顧みて」(第2号、1959年)7頁。

(52) M.T. (1年)「楽しみな日曜日」(第1号、1958年)7頁。

(53) 多磨全生園では1958年12月に宝塚歌劇団のチャリティ収益金によるテレビ2台の寄贈を受けている。前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処 患者が綴る全生園の七十年』「年表」78頁。

(54) C.M. (3年)「退院」(第2号、1959年)28頁。

て、僕は勉強しています。

(記名なし「将来について」第1号)⁽⁵⁵⁾

最早中学生生活もあと一ヶ月で終わろうとしている。僕は今日までの中学生生活三年間をどうすごして来たか。遊び、または勉強に励んだ。それはみな社会に出ていくための準備なのだ。また、就職あるいは進学、皆ばらばにその二つのコースのどちらかをたどるのである。

(K.A.「卒業式を迎えて」第2号)⁽⁵⁶⁾

いずれの作品も「退院」「社会に出ていく」ことを強調しているから、この時期の中学生には、社会復帰は大きな夢、すなわち困難な選択であり、誰もが叶えられるわけではないという認識があったのかもしれない。第9号(1966年3月)掲載の「分教室たより」によれば、それまでに卒業した子どもたち38人の、1965年3月現在の状況は、退園(進学4人、就職20人)、邑久高校進学(1人)、療養中(本園「多磨全生園」、13人)であった⁽⁵⁷⁾。「療養中」の場合、園内で社会復帰の準備をしていた可能性もあるから、必ずしも退園できなかったとはいえないが、1960年代半ばまでの卒業生のうち約三分の一は、卒業後も数年間は多磨全生園にとどまっていたことになる。

またこの時期、施設は子どもたちを積極的に外出させていなかった。全生学園で、1950年代初頭から図画を担当していた補助教師の宇津木豊は、「自然の美しい景色を、思うさま描く事の出来ない事は、子供も私も残念に思っております。今後もし許すならば、子供達と共に、ひろびろと

した園外写生が自由に出来る日の、一日も早く来る事を願うものであります。」⁽⁵⁸⁾と書き、隔離と教育上の要請との矛盾に言及している。

それでも現実には中学生が見たものは、若くして回復した入所者が次々に社会復帰していく姿だった。多磨全生園では、この号の執筆者たちが分教室で過ごした1958年1月から3月までに、12人もの退園者があった⁽⁵⁹⁾。そして1959年3月の卒業生の進路は、邑久高校進学4人、退園即進学2人、退園希望3人である⁽⁶⁰⁾。中学生たちにとって、自分もそう遠くないうちに社会復帰すると考えることは自然であった。補助教師や少年寮の寮父、少女寮の寮母たちも、遠足やサイクリング、近隣の買い物などに子どもたちを連れ出し、療養所の外で過ごす生活に適應させようとしていた⁽⁶¹⁾。

このような中で、退園後、療養所の外で自分が何者であるかを明かせない現実を受け止める様子も記されている⁽⁶²⁾。ある少年は、帰省中の出来事をめぐって、家族との関わりと、自分がハンセン病の治療中であるという現実との間で戸惑う様子を綴っている。

兄の所で遊んでいて暗くなってきたので「帰える」と言ったら、兄は、「泊つてゆけ」

と言ってくれた。僕は本当は泊りたかった。そして、兄の仕事のことや、兄が小さかった頃の話でもしてほしかった。又、兄の赤ん坊と遊んでいたいという気持ちもあった。でもその赤ん坊にもしものことがあったらと思うとどうしても泊れなかった。このときこそハンゼン氏病なんていやだなあーとつくづく思っ

(55) 記名なし「将来について」(第1号、1958年)15頁。

(56) K.A. (3年)「卒業式を迎えて」(第2号、1959年)14頁。

(57) 「分教室たより」(第9号、1966年)7頁。

(58) 宇津木豊「子供と絵」(第2号、1959年)54頁。

(59) 「多磨 退園例年の数倍 三ヵ月間に十二名」(全国国立療養所ハンゼン氏病患者協議会『全患協ニュース』84号、1957年4月15日)。

(60) 前掲、鈴木辰博「昭和三十三年度を顧みて」7頁。

(61) サイクリングについては前掲、氷上恵介「感傷旅行」(同『オリオンの哀しみ』)233頁。渡辺たつ子は、園内の売店に子ども向けの商品がないため、少女寮の子どもをつれて市街に買い物に出ていたという(津田せつ子「別離」前掲、『随筆集 曼珠沙華』102頁)。なお少年少女舎の世話係が子どもたちを療養所外に連れて出ることには、おとなの側の社会への憧れがあったとの証言もある。菊池恵楓園で少年舎の寮父をつとめた工藤昌敏氏は、小学6年生と中学3年生を阿蘇の温泉へ連れて行った経験をめぐって、「やっぱり自分が憧れだったんですね、社会への」と話している。語り手工藤昌敏・杉野芳武、聞き手西浦直子「少年舎時代の思い出(1)」(編集委員会『菊池野』第58巻第4号、通巻第635号、2008年4・5月号)50頁。

(62) 時代は下るが、1960年代から1980年代の邑久高校新良田教室の派遣教師の証言によれば、こうした差別への対抗手段として、社会復帰後にある程度の嘘をつくことはやむをえないとする教育がなされたという。宇内一文「『ウソ』をつく練習までやらざるを得なかった進路保障の実践—ハンセン病患者のための高等学校の派遣教師からの聞き取り—」(日本大学教育学会『教育学雑誌』第44号、2007年3月)を参照。

た。帰りは東京駅まで送ってくれた。電車の中でこう言ってくれた。

「病気であるからといってひけ目を感じるな、みんな同じ人間じゃないか」と。

帰省して一僕は病気である—という気持ちが絶えず心の中にある。考えると口惜くなる。それは仕方のないことかもしれない。

ある日、二番目の兄と、秋葉原ヘラジオの部品を買いに行った。その時は病気であるということをすっかり忘れて、珍しいものを見つめていた。このときが帰省中の一番の楽しみであったかもしれない。

(H.Y.「帰省して」第1号)⁽⁶³⁾

少年は秋葉原へ買い物に出かけるほど軽症であるが、「僕は病気である」という認識が重くのしかかっている。作文を読む限り、両親からは「良く来たなあー、寒かったでしょうー」「一人で来られたら、いつでも来なね」と迎えられており、家族の差別感情を内面化して苦しんでいたのではなさそうだ。隔離と療養所での生活とを通じて、ハンセン病患者としての自己認識を持つようになったのだろう。一方で少年は、秋葉原で「病気であることをすっかり忘れて」商品を見て歩いている。おそらく雑踏の中で、少年の病気を知らない人びとに囲まれ、自分でもそれを「忘れ」という経験が印象に残ったのであろう。入園前から、家族などから病気について話してはならないと指示される子どももいたが、そうでなくても、帰省などの機会に療養所内外を往き来しながら、匿名での社会復帰を必然のものと認識していったことをうかがわせる。

社会復帰を目指す子どもたちは、人生の節目と共に新たな環境に入り、その都度経歴を偽るところから人間関係をスタートするため、育んできた

友人たちとの交流やその痕跡を隠し続けなければならなかった⁽⁶⁴⁾。だからこそ、「五年後に同窓会をやることも相談したし、その間、手紙の交換もしようということにもなった。」⁽⁶⁵⁾と再会を約束している。

(2) 多磨全生園のおとなたちとの齟齬

園内のボイラー室、印刷場、電気室、炊事場などをグループごとに見学してまとめた「園内作業場見学レポート」(第1号)には、それぞれの作業場で働く入所者からのヒアリング結果と、レポート作成などを分担しながら仕上げた模様が詳しく書かれている。これは、各地の小中学校で1940年代から取り組まれていた「こども風土記」の手法を、教師たちが取り入れたものと思われる⁽⁶⁶⁾。第2号では、派遣教師の鈴木辰博が、2年越しで制作した「我が住む町(園)の模型」の完成について報告しており⁽⁶⁷⁾、第1号編集時にはすでに、全生園を自ら暮らす地域としてとらえさせようとして取り組んでいたことがわかる。

しかし、各地で作られた「こども風土記」が、生まれ育った場所について土地の人びとに学び、その成果をまとめたものであるなら、多磨全生園の子どもたちにとって園内で書いた作文や詩、それを集めた『青い芽』は異郷のものであった。すでに見たように、この世代の子どもたちにとって、療養所は通過点になりつつあったからである。社会復帰後の中学生たちは、分教室で学んだことや、療養所で過ごした事実を隠すこともあっただろう。いわば、将来は距離を置かなければならないかもしれない場所についての学びであり、その意味で、療養所における生活と労働を掘り下げる取り組みは、療養所の外の「こども風土記」とは異なる側面があった。

一方、同じく第1号に冬休みの研究成果として掲載された「私の研究」では、学用品や教材費、

(63) H.Y. (2年)「帰省して」(第1号、1958年) 9-10頁。

(64) 2011年11月、大島青松園にてK.M.さんより聞き取り。話者は呂久高校新良田教室から大学進学、就職といった節目ごとに、病歴の発覚を恐れてそれまで築いてきた人間関係を断つ生活に疲れてしまったと述べた。

(65) H.Y. (3年)「卒業に際して」(第2号、1959年) 20頁。

(66) 「こども風土記」とその特徴については菊池暁「学校で地域を紡ぐ—北白川から、さらにいくつもの〈こども風土記〉へ」、各地で制作された「こども風土記」については一式範子作成「こども風土記一覧」(共に前掲、菊池暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ—北白川こども風土記』から一)を参照。

(67) 前掲、鈴木辰博「昭和三十三年度を顧みて」6頁。

ラジオ番組などを対象に、園内生活の諸相が療養所の外との関わりで分析されている。ラジオ番組の分析は、寮で歌謡曲をよく口ずさんでいて叱られたことをきっかけに取り組まれたものである。また学用品や教材費の研究では、故郷の友人との比較も行っており、園内外をつなぐ情報網の中に暮らす子どもたちの、視野の広がり伝わってくる。

丁度冬休みには帰省するので、私だけではなく、一般の人達はどのくらいかかっているのだろうかと思い、近所の同学年のお友達に聞いてみました。結果は下の図の通りです。弟は小学二年生です。こちらの二年生の人を調べればよかったのですが、充分の時間がなくて出来ませんでした。

しかし、私達と、外の学校もそれほどの差がないことがわかった。よい参考になりました。

(S.M.「学用品について」第1号)⁽⁶⁸⁾

先に見たように、学校や分教室の予算という点で、療養所の内外には大きな格差があった。しかし「学用品について」によると、それぞれの子どもが日常的に使う文具などの範囲では、大きな差はなかったようである。「一般」「こちら」と表現される彼我の違いを払拭できたためか、作者はこの研究が「よい参考」になったと締めくくっている。こうした点からも、子どもたちの世界は療養所内外の境界を越えつつあったことがうかがえる。

さらに、教師や療養所のおとなたちが療養所内での生活課題を具体的につかませようとする一方で、回復後に社会復帰する可能性を追う子どもたちは、療養所内のおとなへの批判的な視線を持つようになっていた。

こゝの園では全生時間というのがあって、大人の中には三十分位時間に遅れて集りなどに来る人もある様です。どうして遅れるのか？

不思議です。

(C.M.「時間を守りましょう」第2号)⁽⁶⁹⁾

他人の言葉にすぐあやつられ、すぐ環境に染まる事のないように。たとえ園内に居たとしても年寄のように夢の無いいいじけた考えを持たず、常に他人の立場を考え、人の意見をきき、広い視野で物事を判断してほしい。

(T.K.「卒業を迎えるにあたって」第3号)⁽⁷⁰⁾

近頃の映画の内容は、まったくつまらない。必ずといっていい程、暴力を肯定している。そして悪い人間を英雄のように映画では表現している。[中略]

今の大人の人たちは、皆このような映画を見て喜んで満足しているのだろうか。時代劇を見ても、やくざ者を英雄のように大きく表現している。これでは、この世の中から暴力をなくそうとしても無駄のように思う。

(K.M.「映画についての感想」第2号)⁽⁷¹⁾

若い人びとの社会復帰がピークを迎えようとしていた1950年代後半、子どもたちにとって身近だったのは隔離の中に生き続ける「年寄」ではなく、退園してゆく青年たちであり、その階層分化において中学生たち自身も後者の側にいた。「年寄」「今の大人」への違和感は、「転換期」の療養所を通り抜けているという特有の環境によってもたらされたものであった。

3. 1960年代前半の作文と詩をめぐる

1960年代前半は、引き続き予算不足や補助教師の目まぐるしい交替などに苦しんだ期間であるが、子どもたちの表現は作文・詩、共に充実している。『青い芽』の構成にも変化がみられ、第3号までに掲載された分館長や自治会長による挨拶は消え、本校校長のコメントも不掲載か、それまでの訓示めいた内容に代わって卒業生へ語りかけ

(68) S.M. (3年)「学用品について」(第1号、1958年) 20頁。

(69) C.M. (3年)「時間を守りましょう」(第2号、1959年) 38-39頁。

(70) T.K. (3年)「卒業を迎えるにあたって」(第3号、1960年) 9頁。

(71) K.M. (3年)「映画についての感想」(第2号、1959年) 39-40頁。

るような文章となっている。また、木版画が掲載されるようになった点も特徴のひとつである。ここで取り上げる第4号から第7号が発刊された期間の担任（派遣教師）は、1960年4月に着任した美術科教諭の村上詞郎である。

この時期には、新発生患者の減少に伴い、新たに収容される児童の数も少なくなり、小中学校の統廃合問題が起こっていた。計画の内容は、全国の療養所にある中学校分教室を、香川県の離島にある大島青松園へ移転させるというものであった⁽⁷²⁾。自分たちの処遇の先行きが見えない苛立ちも影響してか、作文にはおとなたちや療養所への反発が多数綴られている。加えて、おそらく卒業後にいずれ退園する進路が定着してきたことによって、相対的に社会復帰への強い願望が薄れると共に、目指す職業や、家族を支えるための就職といった具体的な目標が記されるようになっていく。また、社会復帰、退園の語に加えて、その先の社会や、退園後の自分のイメージについて「実社会」「社会人」などの表現がみられるようになる。他方で「私」「僕」への注目、それに伴う内面の苦しみの吐露といった心的情景も表されてくる。

以下、まず作文や詩について、(1) おとなの入所者への批判、(2) 「私」「僕」を見つめる、(3) 将来像の具体化と家族への思い、の3つのテーマに加え、第5号に掲載された「ペンフレンド」を題材に(4) 差別に抗する姿についても検討する。

(1) おとなの入所者への批判

第3号までにも見られた、療養所やおとなへの違和感が、この時期には質量を増してくる。例えば第5号に掲載された全校生徒4人によるコラム「先生への注文」⁽⁷³⁾では、「先生方があまり早く代わらないようになって欲しい」などの教室運営に関する意見も散見される。とはいえ、やはり療養所での人間関係の息苦しさをおとなのふるまいに感じ、反発する様子が顕著に見える。

夕食の時でした。何かのきっかけで共同生活ということが話に出ました。お母さん[寮母]の話ですと、大人の寮では室に備えつけのプロパンガスを使うにも遠慮して使わないそうです。私は心の中で「共同生活ってつらいのね」と思いました。私は「皆んなで話し合ってみたら」といいました。[中略] お母さんが「いい人だ、いい人だ」と皆んなにいわれる人はだまっている人だといいました。私はすぐ納得がいきませんでした。だまっていたら皆んなの好きなようにされる。もんくもいわないでだまっているのは、皆んなにいい人だといわれるかもしれない。しかし、話し合いでも私は言ってみる。

(M.N.「共同生活」第5号)⁽⁷⁴⁾

この園内に一番多いのは、人の悪口をいうということです。よその人からきくとこんどはほかの人に話す。というようにどんどんひろまっていくのです。その悪口も人から人へと伝わっていくうちに、最初の内容とちがって、あることないことが興味をそそるように加えられていきます。

私はときどき、こう思います。悪口をいっておもしろいのだろうか。そりゃあ、悪口はおもしろいかもしれませんが。でも、言われた人はかわいそうではありませんか。自分がやってもいけないことをいわれることはさびしく、そんなことをいわれる自分をなさげなく思うのではないのでしょうか。

(M.K.「おとなたち」第4号)⁽⁷⁵⁾

療養所の中で一生を生きる人にとっては、何十年も付き合わねばならない相手との衝突を避け、穏やかに暮らすための知恵のひとつが「だまっている人」になることだった。また、医局外来の待合室や、日に三度集まる配食所での噂話は、長期の隔離生活に倦み疲れた人びとの、恰好のうさば

(72) 計画は小学校の分教室を多磨全生園に、中学校の分教室を大島青松園に設置し学齢期の患者をそれぞれの療養所に集めるもので、多磨全生園の関係者は子どもたちや保護者の意見を尊重すべきとしてこの計画に反対していた。前掲、鈴木敏子『「らい学級の子ら」再考』181-186頁。

(73) 「先生への注文」(第5号、1962年) 15頁。

(74) M.N. (1年)「共同生活」(第5号、1962年) 9-10頁。

(75) M.K. (3年)「おとなたち」(第4号、1961年) 8-9頁。

らしだったともいう⁽⁷⁶⁾。化学療法開始以前の子どもたちは、そうしたおとなのふるまいを、将来の自身の姿として受け止めざるを得なかったかもしれない。しかし卒業後の社会復帰が増加してきた時期の子どもたちは、不在の人をおとしめ、その噂をつうじて馴れ合おうとする「ここのおとなの人達」への反感を明確にしている。

このように、退園するという意識が定着した時代に、療養所生活に順応することへの嫌悪感を書き表したという点では、次の二つの詩も、子どもによるおとなへの反発という一般的な解釈はできず、きわめて具体的に療養所生活を否定した作品といえる。

私かとべる羽根と
身軽い小さな身体の小鳥だったら
どんなにか素晴らしいことだろう
でもかごの鳥はいやだ
広い空をおもいきりとびまわれる
小鳥になりたい
うるさいうさや
いやな事から解き放されて
自分の好きな所に
いつでもとんでゆけて
わずらわしい掟なんかのない
自由の世界があったら
私はそこで一生を
静かに暮したい
私はとべる羽根をもった
小鳥になりたい

(K.K.「小鳥になりたい」第4号)⁽⁷⁷⁾

学校のストーブからはき出される
けむり
機関場の煙突から
風に吹き下ろされる

けむり
ゴミを焼くいやな臭いの
けむり

縁側で日向ぼっこしている人も
治療に通っている人も
作業をしている人も
みんな灰色にけむっている

すがすがしい朝だというのに
療養所は
灰色にくすんでいる

(K.I.「けむり」第5号)⁽⁷⁸⁾

(2)「私」「僕」を見つめる

1960年代前半には、卒業後に社会復帰することは珍しくなくなり、1950年代後半に綴られた、退園への焦がれるような切望は影をひそめる。同時に、療養所という社会を研究したり、共同で観察しレポートにまとめるといった文章も姿を消す。中学生が焦点を当てていたのは、療養所で生きる、今の自分の悩みであった。そこでは個々人の内面や、かつての故郷での記憶を反芻する姿が表現された。

例えばある少女は、女性らしさに関心を持ちながら「やさしい」言葉や表現をできない自分のふるまいについて、「なぜ自分の気持と、反対のことを口に出してしまうのか、M竹⁽⁷⁹⁾には全然わかりません。」(M.K.「私」第4号)⁽⁸⁰⁾と戸惑っている。このほか、第4号には「私のペンフレンド」⁽⁸¹⁾、「僕の妹」⁽⁸²⁾といった、タイトルに「私」「僕」がつけられた作文や詩が、前号の倍、計6点掲載された。その中で、3年生の少女が書いた「うさぎと私」は、故郷の家で、母親に受け入れられなかった記憶を綴った作文である。作者は、母から辛く当たられ、家屋から離れた小屋でうさ

(76) 2017年10月、多磨全生園にてT.K.氏より聞き取り。

(77) K.K. (3年)「小鳥になりたい」(第4号、1961年) 16-17頁。

(78) K.I. (3年)「けむり」(第5号、1962年) 18頁。

(79) 竹を割ったような性格と名前の一文字からつけられたあだ名と思われる。

(80) M.K. (3年)「私」(第4号、1961年) 11頁。

(81) M.A. (1年)「私のペンフレンド」(第4号、1961年) 11-12頁。

(82) I.T. (1年)「僕の妹」(第4号、1961年) 12-14頁。

ぎに雑草を食べさせていた時の思いについて、「かれらは何の楽しみがあるのだろうか。ただ、ねて食べているだけなのにと考える。けれど、うさぎの目は赤く美しい。その目で外の景色を見て何か喜びを深くしているのかもしれない」⁽⁸³⁾と記している。その後自宅に戻り、母に「さっきご免なさいね」と謝ったというから、箱に入れられたうさぎがなお美しい瞳を持つことと、自らとの境遇を重ねて、母との関係を受容しようと努めているようにも見える。

別の少女が見つめたのは、ハンセン病の症状に苦しみ中で変化する自身の姿であった。

この夏休み期間こそ、私にとって最大の敵であった。帰省出来なかったので、長い休み中をどう過ごそうかと当惑してしまっただけ、いざ休みに入ってみると「毎日が治療で始まり、治療で終わっていった」といってもよい程、医局と密接な関係をもつようになってしまった。夏の暑さなかに、顔に繃帯を巻き眼帯をかけ、耳帯までかけた。ある時には、両眼に眼帯をかけて盲の人と同じ様な気持ちを、味わったこともあった。それでも合間をぬっては、夢中になって本を読んだ。私の暗い気持ちを慰めてくれるものは、書物以外になにもなかった。

しだいに反抗的になり、笑いをだんだんと忘れていった。こんな私を母はひどく心配して、休み中に泊まりがけで面会に来てくれた。その頃の私は、見る物、見る物が真すぐに見ることのできない、ひねくれた子供に変わりつつあった。

(K.K.「つらかったこの一年」第4号)⁽⁸⁴⁾

ハンセン病は病型によって症状に違いがあり、患者同士でもその軽重を比較してしまう。顔中を包帯で覆ったというこの少女は、友人から「Kちゃんの顔、月の裏側みたい」と言われ、「その

ことばを聞いた時の私の気持は／恐らく誰にもわからないだろう」⁽⁸⁵⁾と書いている。少女はこの危機を、精神的には書物の世界に没頭することで、そして現実の世界に対しては「ひねくれた子供」になることで乗り切ろうとしたのだった。

翌年の第5号では、「僕のこと私のこと」という章が立てられ、3つの作文が取り上げられた⁽⁸⁶⁾。そのうちの一つ、前掲「うさぎと私」の作者の文章をとりあげてみよう。

それから退園して一年足らずで、再び発病した私は、バレリーナーになるなんて、とんでもない夢だと気付きました。こんな夢を描いている自分がおかしくなってきた。いつ退園できるかわからない病気。もし退園しても、今の私のように又、入園するかもしれないのに、なんでバレリーナーになれる可能性があるだろう。たとえ夢であろうとバレリーナーになった自分を想像している私がいやになった。それからそんなバレリーナーの夢は、私の中から消えていった。今ではバレエを見ても「美しいな、きれいだな」と思うだけで、自分が王女様になってしまうようなことはない。[中略]

今はだから私には夢がない。だが私は、自分の生き甲斐のある人生が欲しい。生きているということを自分自身で味わってみたい。そして社会人として精いっぱい働いてみたいのだ。療養所のように垣根のない自由な世界で、自分が生きていることを確かめてみたいのだ。愛生園の高校などに行きたくない。もうこれ以上、囲いのある生活はしたくない。できるものなら早く退園し、この十年間の空白を埋めたい。

この私の願いを夢といえるのなら、私は夢をもっているのだ。私はその夢に対して全てをかけよう。その夢を自分の手にとってみる事が出来るように。この夢こそは大切に

(83) K.I. (2年)「うさぎと私」(第4号、1961年) 15頁。

(84) K.K. (3年)「つらかったこの一年」(第4号、1961年) 4-5頁。

(85) K.K. (3年)「私の顔」(第4号、1961年) 18頁。

(86) このうち2篇は教師からも注目されている。前掲、鈴木敏子『「らい学級の記録」再考』106-111頁、前掲、氷上恵介「感傷旅行」(同『オリオンの哀しみ』) 231-232頁。

つかいたい。

(K.I.「バレーリーナーへの夢」第5号)⁽⁸⁷⁾

作者は自分の世界を守ることの難しい環境で、自我を鍛え育ててきたのだろう。退園が「全てをかけ」る夢と語られる様からは、社会復帰が現実となっても、その後の具体的な将来像を描くことが困難になるほど、少女にとって隔離が重大な桎梏になってしまっていることがうかがえる。

そして、療養所に生きることへの強い反感ゆえに、少女は新良田教室への進学を望まなかった。岡山県の長島愛生園への転園を余儀なくされる新良田教室への進学は、必ずしも中学生たちが一様に目指す進路ではなく、例えば高校進学をめぐって療養所のおとなたちと対立したある少女は、その葛藤について次のように書いている。

私は一年生の時から「長島の高校には行きたい」と思っていたし、お母さんも「無理して行かなくても良いだろう」といつていた。だから途中で病気が騒いで「引用者注・症状がぶり返すこと」退園の予定期日がのびたからといって、私の考えはやはり変わらなかった。だから先生方からいくら進められても「行きません。受けません」の一点張りだったが、寮母さんや他の人達から進められると、私も困った。それまで受けてきた補習も、素直な気持ちで受けられなくなり、先生方に対しても、自然な態度で接することができなくなった。

(K.K.「つらかったこの一年」第4号)⁽⁸⁸⁾

おとな、特に補助教師や寮母たちにしてみれば、新良田教室は全患協運動の成果として手にした場所であり、子どもたちの将来を変え得るステップだったから、当然進学を勧めただろう。しかしすでに回復し、衣食住の環境が整えば社会復帰できる状態であった一部の中学生にとって、新良田教室への進学は必ずしも最優先事項ではなかった可能性がある。実際、1950年代には高卒者の就職難が続き、就職を優先する場合には中学校卒業時の方が有利であった⁽⁸⁹⁾。1960年以降、療養所の外では高校進学率が向上してゆくのだが、この前後に療養所で中学校を卒業した子どもたちが卒業後にできるだけ早く退園したいと願った場合は、高校進学よりむしろ、中卒の子どもたちを多く雇用した工場などへの就職を選択したかもしれない。これには単純作業を行う工場などの方が履歴を問われず、匿名でも就職しやすかったという背景が影響していた可能性もある。

また、新良田教室の第一期生（1955年9月開校）は男子50人、女子3人であり⁽⁹⁰⁾、ハンセン病療養所に女性が少なかったとはいえ、あまりに大きな男女差があった。女子生徒がこうした環境に飛び込んでいくには、強い動機と相応の支援が必要だったと思われる。また、1960年の日本の女性の平均初婚年齢は24.4歳であり⁽⁹¹⁾、結婚を機に退職する可能性が高かったことを考えれば、新良田教室で4年間学歴をつけるよりも、家庭や職場で働きながら結婚の準備をするを選択する場合も少なくなっただろう。加えて退園後に自宅へ帰る場合は、進学について家族の承諾を得られるかという問題もあった。実際のところ、本稿で検討している、1958年から1965年までの『青い芽』には、女子生徒が新良田教室への進学について歓迎している作文は、第2号に1点掲載されただけである⁽⁹²⁾。中学生が「私」「僕」を見つめる視線に

(87) K.I.「バレーリーナーへの夢」（第5号、1962年）29-30頁。引用中、バレーリーナ、バレーリーナーの表記は原文に依った。

(88) 前掲、K.K.（3年）「つらかったこの一年」5頁。

(89) 加瀬和俊『集団就職の時代 高度成長のにない手たち』（青木書店、1997年）50頁。

(90) 「療養所に最初の高校誕生 愛生園で開校式挙行 文相、厚相代理も出席」（全国国立療養所ハンセン氏病患者協議会『全患協ニュース』第53号、1955年10月1日）。

(91) 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ、人口統計資料集2020年版、表6-12全婚姻および初婚の平均婚姻年齢：1899～2018年より。
https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2020.asp?fname=T06-12.html、最終閲覧日2021年12月20日。

(92) A.T.（3年）「卒業を目の前にして」（第2号、1959年）16-17頁。

はジェンダーによる差異があり、新良田教室への進学判断にあたって、それが表面化したことは容易に想像できる。

一方男子生徒にとっても、未来の自分を探ることは容易ではなかった。第5号で、「バレリーナーへの夢」と並んで注目されたのが、2年生の少年による「僕の将来」と題する文章である⁽⁹³⁾。彼は少年寮でも分教室でも独自の世界を持ち、そこからの表現を続けた。第4号ではひとりだけ「気象詩集」というコーナーを得て、空や雲、風といった自然をすっきりと表現した詩を掲載した⁽⁹⁴⁾。翌年の第5号には「机の上」と題し、少年寮の自分の机に「僕のグットアイディアー」あふれる世界を築く様子をユーモラスに描いている⁽⁹⁵⁾。そこには創意工夫と共に、自分の精神を守ろうとする深刻な戦いがあるように見える。

そして少年は同じ第5号に掲載された「僕の将来」で、療養所の歪みを指摘した。この作文は鬱屈した日々を悩む作者が、教師から内面を表現してみるようアドバイスを受けて書いたものであるが⁽⁹⁶⁾、その過程で浮き彫りになったのは療養所の現状への反発だったのである。

療養所では食うことの心配はいらない。ただ学校へ行っているだけでお金もくれる。少しだが― 着る物もくれる。それだけに人間がイカレちゃう。療養所は垣根があって、そこから外に出ては駄目。自由に遊びに行けない。それに共同生活だ。大人は、今の生活が大きくなって社会に出たら役に立つと言う。僕もそう思うが、全部が全部良いとは思えない。不満や、嫌なことがあっても、共同生活では言うことも出来ない。[中略]

毎日の生活は同じことを繰り返しているに過ぎない。[中略] たまの日曜日に卓球をやるか、少年寮の作業をやるくらいが変わった

ことである。こんなことをやっていてよくあきないものだと思う。すっかり身に着いた習慣になってしまったらしい。それに週に二度くらい映画がある。子どもにとってよくない映画が来たときには、見に行けない。けれども楽しみと言えば、この映画ぐらいのものである。それに自分は、もともと映画は好きである。外出などすると、映画ばかり見ている。ということはふだん娯楽が余りにも少なく、映画だけが楽しみなので、いやでも好きになってしまうからだ。それにあまり良い映画がこないためもある。こう[した]面からも早く退院したいという希望を、自分だけではなく、子供はみんなもっている。こんなことが退院の希望だなんて、ちょっと情無い気がするが、事実だから仕方がない。

(T.K.「僕の将来」第5号)⁽⁹⁷⁾

変化のない単調な毎日、自由な時間を持ってない限定的な生活範囲、周囲のおとなによる小言、そうしたもののひとつひとつに敏感に反応し、不満が鬱積していく様子がうかがえる。見たい映画を見ることが退院を目指す動機であることについて、作者は「ちょっと情けない」と書いているが、これは既述したおとな同士の関係への違和感を持ち、干渉に反発する子どもの、自然で具体的な欲求であり、社会復帰への動機として多くの子どもたちに共通していただろう。

鈴木敏子はこの作文について「この疎外状況は単に彼ひとりのものでなく、現代の特徴的、一般的状況でもあるのだ。それがこの閉ざされた園に住む彼の場合は、外の社会の人より早く、強く意識されているのだ」⁽⁹⁸⁾としている。確かに作者は、こうした葛藤の原因を、同じ作文の中でふれている幼少時の発症や不遇ともいえる家庭の状況、あるいはハンセン病患者やその家族への差別などに

(93) 前掲、鈴木敏子『「らい学級の記録」再考』111-120頁。

(94) T.K. (1年)「からっ風」「雲」「夕だち」(第4号、1961年)19-20頁。「気象詩集」のタイトルでまとめて掲載されている。

(95) T.K. (2年)「机の上」(第5号、1962年)13-14頁。

(96) T.K. (2年)「僕の将来」(第5号、1962年)26頁。先生から「なぜ勉強に熱が入らないのか、なぜすぐに反抗したくなるのか、黙ったままでは自分が誤解されればなしでそんだ。そんな自分の気持ちを作文に書いて、文集に載せてみないか」と勧められた、とある。

(97) 前掲、T.K. (2年)「僕の将来」23-25頁。

(98) 前掲、鈴木敏子『「らい学級の記録」再考』118頁。

は求めている。そうした状況は把握していただろうが、どうしても勉強する気が起きない、周囲に反発するばかりの自分の混沌とした心象を探る中で、治ってもなお衣食住が保証された隔離の場の問題点をつかみとった。葛藤をくぐりぬけて療養所批判にたどり着いた、思索の表現といえよう。

このふたりは、第5号に掲載されたコラム「ズバリ一言」⁽⁹⁹⁾にて次のように書く。「もっと自由に、気楽に、のびのびとした生活がしてみたい(T.K.)」「おとなは、子どもの生活をあまり干渉しないでほしい(K.I.)」と。おとなの「干渉」を拒んだ少女は、第4号の表紙の、刈り込まれた柵の垣根とそれを越えて伸びる巨木の版画の作者でもあった。

(3) 将来像の具体化と家族への思い

1960年代前半の中学生たちは、将来像を具体的に綴った作品も数多く残した。そこでは「社会人」「実社会」などの語が使われ、社会人としての責任についても触れている。まず自動車整備工を目指した少年の作文を引用しよう。

何をやるにも、物事を考えるにも責任を持ってやる。自分、いや人間には自由がある。僕はその自由だけを使っていた。思う存分に。ところがそれは間違っていた。自由の中には責任があるということだ。この地上に生れて十五年間、自由だけで生きてきた。でも、もうすぐ中学校を卒業する今は、責任ということ自分の手でたしかめた [い]。普通の人から見れば、スローで馬鹿な人間かもしれないがそれでもいい。僕は自由と責任をやっと身につけて一社会人になろうと思う。[中略]

自分のやりたいことは自動車の整備、これが頂上である。その上までいくには横道にそれたり、右折禁止のところを曲ったりしても Teppen まで登るつもりである。進学をやめ

たのは、もともと勉強は好きじゃないから無理をして行ったところで出席をとってどっかに遊びにいっちゃうだろう。学校だけが人生ではない。自分がやりたいことをやれたならそれが一番幸福だ。

(T.K.「わが道をゆく」第6号)⁽¹⁰⁰⁾

別の少女は空想の世界を描いた作品の中で、「お友達は高校へ進学するらしく、一生懸命勉強しているけど、私は進学はしないけれども実社会に出て、お母さんのかわりに一生懸命働こう。そして立派な大人になろうと、心に誓ったの」⁽¹⁰¹⁾と書く。作者は別の作文で新良田教室への進学を拒否していることから、故郷へ戻って家族を支えたいという希望を持っていたことをうかがわせる⁽¹⁰²⁾。また「実社会」「立派な大人」という言葉を選んだことには、「今の自分の生活よりも、ここに書いたような生活の方が、はり合いがあるようで、憧れているのかもしれませんが」という作者の思いが反映されている。イマジネーションの世界を通して、少女の内にある将来像が具体的に伝わってくる。

このように、第4号以降では自分の今と将来を具体的に考え、場合によってはそこに自らの責任を見出す傾向がみられる。人数の少ない分教室での作文であるから、それぞれの中学生の性格や家庭環境がストレートに反映した結果ととらえることもできるが、いずれも社会復帰後のイメージがつぶさに描かれており、それを叶えるために必要な条件を探った結果ともいえよう。

将来像が具体性を帯びると同時に、故郷の家族との関係についても詳細に綴られるようになる。そうした文章からは、ハンセン病を病む自分と家族との関係をどのように構築するかを模索する様子が伝わってくる。例えば、自衛官を父に持った少年はその仕事ぶりを詳しく紹介し、自分も自衛官になりたいと書いている⁽¹⁰³⁾。また父との関係に

(99) 「ズバリ一言」(第5号、1962年) 21頁。

(100) T.K. (3年)「わが道をゆく」(第6号、1963年) 5-6頁。

(101) K.K. (3年)「私の空想物語」(第4号、1961年) 27頁。

(102) 前掲、K.K. (3年)「つらかったこの一年」 4頁。

(103) 前掲「ズバリ一言」 21頁。

において自分が未熟であることを省察したり⁽¹⁰⁴⁾、自分が帰省を終えて全生園へ戻った後にきつと寂しがるであろう妹を心配したりもする⁽¹⁰⁵⁾。別の少年は、故郷で農家を営む両親から、弟と二人で家業を継ぐように言われるが、おそらくは体力面での不安と弟への気遣いから、別の道を進むことを自分に言い聞かせるような文章を書いている⁽¹⁰⁶⁾。

親が療養所に入所している子どもや、病気を患う家族を持つ子どもの場合は、社会復帰して働きながら家族を支える将来像を描くこともあった。2年生の時に踝の形成手術を受けた少女は、「足が良くなって退院したら、お父さんの体が弱いので、働きながら高校へ行きたいと思っています。そして、早くお父さんを大切にしたいと思っています。」⁽¹⁰⁷⁾と書いている。これだけでは通常の親孝行と言えようが、少女がハンセン病を病んだことと父への配慮とは深くかかわっていた。次の場面は、故郷の父に手術の是非を相談した時のことである。

私は「ううん」というのがせいいっぱいでした。それはお父さんの顔を見るのが苦しかったからです。お父さんは胃下垂と高血圧なので、とても苦しそうなのです。そして私がライという病気なのでとてもかわいそうです。私は、お父さんを早く安心させたい気持ちで胸がいっぱいでした。[中略]

私はお父さんに何も言えない。それは、お父さんが私のためにつくして下さっているからです。また、お父さんの体が弱いのに私達のことを考えていることもそうだ。そしてなるだけ心配かけないように努力している私も、泣きごとが出ないようにしているからだ。お父さんに心配ごとをふやさないのが一番今のところ良いのだ。なぜなら、心配かけると病気が悪くなるからだ。このことが頭にある

のでお父さんには反対することが出来ません。またそれは良いことだと思っています。

(M.N.「私の希望」(第6号)⁽¹⁰⁸⁾)

勤勉や孝行といった通俗道徳に則って将来像を描くことは珍しくなかったであろう。しかしここではそれが、自分がハンセン病であるために家族の負担になっているという罪悪感と結びついている。少女が「お父さん」に過剰ともいえる気遣いを見せる背景には、療養所を出て親孝行をしたいという願いと共に、これ以上父の負担になりたくないという思いもあっただろう。そして、当時少女寮の寮母であった津田せつ子によれば、作者は自宅で過ごした経験が少なかったようである⁽¹⁰⁹⁾。また、作文には少女寮の「お母さん」(津田)は登場するが、故郷の母は現れない。ハンセン病を病んだ子どものいる家族の関係が難しいものだったであろうことは容易に想像でき、退園後家へ帰ろうとする子どもが、その困難に対して自責の念を持って向き合い、償おうとしていた様子が伝わってくる。

(4) 差別に抗する

1961年7月、中学生向けの雑誌『中学時代二年生』に「ニュースストーリー 望郷が丘の少年」が掲載された⁽¹¹⁰⁾。多磨全生園に入所した中学生「竜巻良太郎」の目を通して、療養所や入所者の状況などについて伝える、3段組6ページのルポルタージュ風読み物である。

主人公のモデルとなった実在の少年は、この記事には虚構が多いと批判する作文を書き、それが第5号に掲載された。

だからいつものように「中学時代」七月号が届けられてきたとき、僕は小説を読んでいたので、K君に先に見せてやった。するとK

(104) I.T. (3年)「父」(第6号、1963年)7-8頁、前掲「ズバリ一言」21頁。

(105) I.T. (1年)「僕の妹」(第4号、1961年)12-14頁。

(106) K.O. (3年)「帰省」(第7号、1964年)20-23頁。

(107) M.N. (2年)「私の希望」(第6号、1963年)12頁。

(108) 前掲、M.N.「私の希望」11頁。

(109) 津田せつ子「思い」(前掲、津田せつ子『随筆集 曼殊沙華』)114頁。

(110) 南坊けさ雄「ニュースストーリー 望郷が丘の少年」(『中学時代二年生』旺文社、1961年7月、76-81頁)、国立国会図書館所蔵。

君が「あっ、でている」と言った。すぐあの
ことだと分かったので「どれ、どれ」と雑誌
を読んだ。ニュース・ストーリー『望郷が丘
の少年』という題がつけられていた。うまい
題名をみつけたなーと思った。でも読んでみ
ると嘘の多くあるものでびっくりした。あま
りくわしく僕達のことをくわしく取材して
いったのではないから、内容は嘘のかたまり
のようだ。その意味で興味深く読んだ。

だからここに書かれている主人公、竜巻良
太郎君は僕達四人のうち、誰れにもあてはま
らない。僕達に関係していない。一つの物語
として読むとおもしろいかもしれないが、こ
こに書かれているのは僕達だと思えば、書い
た人におこりたくなる。特に社会見学の時、
行き先に着いてもバスから降りられないと書
いてある。実際には下りているのだ。全体が
こんな具合にいかにもこの病気がおそろしい
かのように、この記事を読む人に同情を持た
せるように書いてある。しかし、僕は同情な
んていらない。この病気を正しく理解してく
れる人が、一人でも多くなればそれでいいの
だ。

(I.T.「ペンフレンド」第5号)⁽¹¹¹⁾

『中学時代二年生』に掲載された「望郷が丘の
少年」の該当部分は以下の通りである。

「ここはS駅前だ。これが駅で、あれはMデ
パートだ。そのとなりもデパートだ。」

「みんな楽しそうだなあ。先生、早くおりま
しょう。ちょっとでいいから、デパートへ入っ
てみましょう。」

「それはいけない。デパートは。」

「それなら駅へいってみましょう。」

「だめだよ。君、おりてはいけないんだ。」

「えっ？」

「バスの中から見物するんだ。残念だが、窓
からのぞくだけで、しんぼうするんだ。」

良太郎君は、かたい壁にぶつかったよう
にハッとした。そうなのだ。バスからも、療
養所からも、むやみに外へ出られないのだ。
他人に病気をうつさないために、とじこめら
れている身だったのだ！⁽¹¹²⁾

少年はこのくだりを、ハンセン病がおそろしい
伝染病であるかのように思わせる印象操作だとし
て反発している。そして、この記事の読者から大
量に手紙が届いたことについて、「その大部分が
記事の嘘の内容にとらわれてしまった同情の手紙
である。」と批判しつつ、「さいわい文通をしよう
という人が沢山あったのでペンフレンドになっ
て一人でも多くの人に、この病気を正しく知って
もらうために、今も文通をつづけている人が十人位
いる。」と書いている⁽¹¹³⁾。作者が、同情を装った
差別に抵抗し、自分の手で療養所の外へ情報発信
を行おうと、積極的な交流を行う様子が読み取れ
る。

「おそろしい伝染病」であることを理由に子ど
もを外に出さないという態度は、療養所内部にも
あった。鈴木敏子は同年9月、村上詞郎と共に社
会見学のコースについて多磨全生園の事務分館で
園職員と協議した際、分館長から「この前厚生省
から注意されたのに、またこんなコースを出して
くるとは何ですか」「わたしが直接きいたわけ
ではないが、きまってますよ。ともかくここにいる
患者は伝染病患者として隔離されてんだから、人
混みの中に出てはいけないんですよ」と叱責され
たという⁽¹¹⁴⁾。同時代の療養所職員、少なくとも分
教室の運営や予算についての交渉窓口となってい
た事務分館職員の認識は、バスから降りることは
おろか都心の賑やかな場所へ子どもたちを連れて

(111) I.T. (2年)「ペンフレンド」(第5号、1962年) 10-11頁。

(112) 前掲、南坊けさ雄「ニュースストーリー 望郷が丘の少年」80頁。

(113) 前掲、I.T. (2年)「ペンフレンド」11頁。

(114) 前掲、鈴木敏子『「らい学級」の記録』再考』89頁。鈴木と村上は分館長に「去年だって上野公園にいったんですよ。それより後退するってことは考えられませんね。」と述べたというのが(同前)、村上詞郎「昭和三十六年度分教室の行事(学事報告)」(第5号、1962年) 34頁に1961年5月8日の事項として「社会見学 都内方面」とあるから、分館長のいう「厚生省から[の]注意」はこのことに関連しているのかもしれない。

行くことにすら否定的だったのである。村上詞郎は『青い芽』第5号の「一年の回顧」において、この社会見学の様子を「春秋二回の社会科見学バス旅行は都内方面で、園当局、全生会、父兄の皆様の全面的な御協力のもとに、全コース有意義に一日を過ごさせて戴き有難うございました」⁽¹¹⁵⁾と記載している。現実にはそこに、鈴木が告発していたような施設側の無理解との確執があったと思われる、村上が「全面的な御協力」という言辞を呈していることには、無論皮肉が込められているであろう。

ただし村上は同じく「一年の回顧」の中で、次のようにも記している。「七月には旺文社より[引用者注・記者が] 来訪、雑誌『中学時代二年生』にニュースストーリー『望郷ヶ丘の少年』として当学級が紹介されて、全国的な反響を呼び、多数のお手紙、及び慰問の品々を戴き生徒一同感激、本誌を通じてあらためてお礼申し上げる次第です。」。取材を受けた中学生が記事への批判を展開し、同じ号で派遣教師がその記事をめぐって（たとえ形式上であっても）「生徒一同感激」と記載する、このような形で差別への向き合い方の齟齬が表れたのもまた、「転換期」の『青い芽』の特徴であった。

4. 木版画にみる分教室と療養所

—1960年代前半の作品を中心に—

1960年4月から1963年3月まで、全生分教室で派遣教師を務めた村上詞郎は、美術科教諭としてトーテムポールやモザイク画、白色セメントのビーナス像などの共同制作を積極的に進めた⁽¹¹⁶⁾。『青い芽』への木版画掲載も、村上が着任した1960年度から始まっており、その退任までの第4号～第7号に、全体の約半数にあたる57点の木版画が掲載されている。

初めて版画が収録された第4号には、ハガキ大の小さな画面に濃紺の単色刷の作品が8点見られる。題材は、白衣とマスクを着けた人物や、当時



図② 無題 M.K.(3年)



図③ 無題 K.I.(2年)

園内に設置されていたボイラー室の巨大な煙突、柵の垣根などであり、当時の多磨全生園を象徴するものが選ばれている。白衣とマスクの人物は、派遣教師か医師もしくは慰問目的の訪問者であろうか【図②】。表紙を飾ったのは、1960年春に低く刈り込まれた柵の垣根をモチーフにした版画である【図③】。高くそびえる樹木との対比で、垣根の丈の低さが際立っており、その構図は子どもたちの将来が療養所の外へ開かれていくさまの暗喩にも見える。

続く第5号の木版画は、文集に合わせてB5判となり、黒1色の作品が12点掲載されている。紙質は全15号の中で最も粗悪である。同年の分教室の予算は版木を購入できないほど逼迫しており、前年の卒業生が使った版木の裏面を用いて制作したという⁽¹¹⁷⁾。題材は教室の中央に置かれていたダルマストーブ【図④】や、画面いっぱいに枝を広げた樹木【図⑤】などで、前年よりも表現の力強さが増している。同年に在籍した4人の児童それぞれの、版木を彫る自画像も制作されている⁽¹¹⁸⁾。うち1点は、手を休めて見上げるような恰好で、版画を観る者を正面から注視している【図⑥】。

第6号では、「版画 行事カレンダー」「版画 私たちの学校生活から ある日」と題し、各12点、計24点の木版画を、全校生徒4人で制作している。独創的な構図が、黒と地色の組み合わせで引き立てられた作品群である【図⑦】。行事や日常の風

(115) 村上詞郎「一年の回顧」(第5号、1962年) 5頁。

(116) 天野秋一「望郷台に立つビーナスの像」(『多磨』通巻968号、2002年9月) にビーナス像の実物の写真が掲載されている。トーテムポールについての写真は現在見つかっておらず、版画に刻まれるのみである。

(117) 前掲、村上詞郎「一年の回顧」4頁。

(118) 第12号以降にも自画像が掲載されているが、それらはすべて正面のアングルである。



図④ 「ストーブ」
I.T.(2年)



図⑤ 「樹」 T.K.(2年)



図⑥ 「人物」 K.I.(3年)



図⑦ 「9月 トーテム
ポール完成」 T.K.(3年)

景を主題として、学校という集団生活の場面を多く切り取ったことに、分教室の共同制作という側面が強く意識されていることがわかる。ただし、第6号と第7号の版画の余白に作者の名前が記載され、また個性的に表現する工夫が構図や彫り跡にみられることから、児童それぞれの作品としての性格を色濃く示す表現でもある。

第7号では、前号に続いて分教室を中心とした園内の様子を題材とする版画が、計19点掲載されている。前年に続き、はなやかな地色と黒の組み合わせでぱっと目を引く美しさがある。中でも、全生徒で制作し、分教室のグラウンドに面した築山（望郷の丘）の頂上に建てられたビーナス像の制作場面【図⑧】や、永代神社の流麗な木彫に注目した「神社」【図⑨】、陰と陽のコントラストで巨大なドラムが迫力いっぱいに写し取られた洗濯

場の風景【図⑩】などの作品からは、限られた生活の場で、それぞれが個性豊かに対象をとらえ、工夫をこらした表現に取り組んだことが伝わってくる。

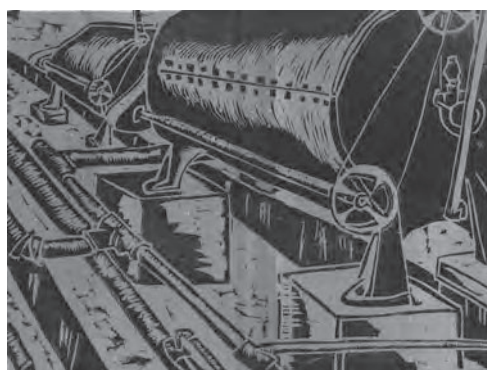
これらの版画にたびたび現れる特徴的なモチーフが、【図④】にあげたダルマストーブである。1960年前後の分教室では暖房設備が不足しており、教師たちはストーブとそのための燃料（薪、石炭）を繰り返し求めていたが、事務分館や本館の職員は当初、予算不足を理由に、ストーブ増設に消極的であった⁽¹¹⁹⁾。ハンセン病は冷えると神経痛を引き起こすこともあり、ストーブの台数は重大事項であった。第4号から第6号には、石炭ストーブの煙突取り付け作業を題材にした版画も掲載されている。さらに第6号と第7号には、校舎の前にそびえていたプラタナスの位置から推して、ほぼ同ジヤングルから、分教室に設置された煙突を構図のメインにすえた版画がある【図⑪-1・図⑪-2】。第6号の図⑪-1では煙突は1本し



図⑧ 「彫刻」 Y.T.(3年)



図⑨ 「神社」 T.T.(2年)



図⑩ 「洗濯場」 M.N.(3年)

(119) 前掲、鈴木敏子『「らい学級の記録」再考』150-158頁など。



図⑪-1 「校舎」
I.T.(3年)



図⑪-2 「校舎」
M.N.(3年)

か描かれないが、第7号の図⑪-2では3本に増えており、微妙なアングルの違いはあるものの、年ごとにストーブが獲得されていった様子がうかがえる。分教室の正面玄関や、シンボリックなプラタナスではなく、煙突を中心にとらえたところに、教室の中央に据えられていたダルマストーブが、分教室にとって重要な存在だったことが示されている。

これらの版画のもうひとつの特徴は、当時未だ入所者の手に委ねられていた園内作業の場面が毎号登場していることである。第4号には板塀の修理をしているらしい作業の姿がみえ、第5号では上述したストーブ用の煙突の設置作業や、建物の壁にたてかけられた作業用の一輪車（ネコ車）が題材に選ばれている。第6号は分教室の行事と学校生活をテーマとする版画が並んでいるが、最後の1点には木工場をテーマとした作品が取り上げられている。第7号にも作業場の様子を刻んだB4判の版画が3点あり、中でも「石炭運び」【図⑫】には激しい労働に従事する姿が克明に刻まれている。

このように労働をめぐる版画が制作されている点は、全国の小中学校で1950年代から1960年代に制作された教育版画と共通した特徴である。この時期には、地域の生業を自らの将来像としてとらえることを目的に、農林漁業の労働場面を題材にとった版画が多く制作された⁽¹²⁰⁾。分教室の子ども

たちが園内で働く人びとを題材に制作した版画にも、労働の力強いさまから、作業に従事する人への素朴な尊敬の念がうかがえる。おそらく、労働の描写によって地域に生きる姿勢を育むという教育版画運動の特徴が、療養所にも取り入れられたものであろう。ただし、全生分教室の子どもたちは遠くない時期の社会復帰を目指しており、先に見た園内の作業場見学レポートと同様、療養所を支えるために働く姿を写し取るという意味での版画制作は、多くの中学生にとって、直接的に将来像と結びつくものではなかった。それらはむしろ、学校生活の風景と同じく、多磨全生園に生きる中学生たちの「今」を取りまくひとつの場面の記録という性格が強いと考えられる。

先にみた作文や詩では、退園を見据えて将来を模索するそれぞれの営みについて綴られており、その意味で「転換期」の中学生による表現という特徴を示していた。一方で、木版画の制作においては、共通の「今、ここ」の記録、すなわち分教室全体の記憶ともいえる対象をとらえようとした側面がある。第6号と第7号の版画制作のテーマが、学校行事や分教室の日常風景であるというだけでなく、例えば第7号の作者のひとり、版画を彫り、ビーナス像を作った思い出は何にも代えがたいこと、またビーナス像やトーテムポールを立てた築山や分教室周辺の土地を、自分たち子どもの陣地のように感じていたと語っている⁽¹²¹⁾。多磨全生園における教育版画は、このような集団としての記憶を刻み、集団にとっての課題を観察し



図⑫ 「石炭運び」 Y.T.(3年)

(120) 町村悠香「みんな、かつては版画家だった——教育版画運動と大田耕士旧蔵版画集から考える「私たち」の戦後美術史」artscapeキュレーターズノート、2021年12月15日号、https://artscape.jp/report/curator/10172818_1634.html、最終閲覧日2021年12月20日。

(121) 2020年2月、全生分教室の卒業生K.T.氏より聞き取り。

て表現したものであり⁽¹²²⁾、その意味において、同時代に療養所の外で展開されていた、教育版画における共同制作と同様の意味合いを持っていたといえるだろう⁽¹²³⁾。

村上の退任後、木版画は素朴な作風へと変化し、点数を減らしながら掲載された。制作の指導は、1960年代に『多磨』の表紙絵をたびたび描いた天野秋一や、多磨陶芸室で活動した藤田四郎ら、補助教師によって受け継がれたものと思われる。



図⑬ 「藤娘」 S.Y.(2年)

第8号では、たった一人の中学生が、熱心に打ち込んでいた日本舞踊を題材に5点を掲載した【図⑬】。その少女を含む2人の児童が各5点を披露した第9号では、3年生が社会見学、1年生が園内の労働風景をテーマとする版画を制作した。特に3年生の少女の作品は、1年生、2年生の時の作品に比べ、構図、表現力共に飛躍的に向上している。おそらく、「退院して／洋裁を習って／早く一人前になって／好きな服を作って／多くの女性が着てくれて／美しくなったら／どんなにかすばらしいだろう」⁽¹²⁴⁾と綴った作者の、美しいものへの憧憬が、表現の成長を促したのだろう⁽¹²⁵⁾。

その後、やがて版画が掲載されない号が登場し、技術的にも構図においても徐々に朴訥としたイメージとなってゆく。大きな要因は、全生分教室で版画制作を指導した村上詞郎の退任であり、子どもたち自身の背景としては、1960年代半ば以降の分教室及び中学生の進路や療養所の変化、加え

て療養所内外の中学生に共通する、表現の質的な変化があったと思われる⁽¹²⁶⁾。

おわりに

本稿では、1950年代後半から1960年代前半の『青い芽』において、社会復帰及び将来像の模索と、療養所のおとなたちへの批判を特徴とする表現がなされていたことを明らかにしてきた。

1950年代後半の多磨全生園では、未だ療養所の外に写生に出かけることもできなかったが、子どもたちはすでにラジオやテレビなどを通じて療養所の外にも通じる情報を手に入れており、化学療法によって回復し退園していく青年たちの背中を見ていた。そして分教室の教師や寮父母の支援を受けながら、「私は退院するのだ／卒業したら」(「退院」)、「この病気にもとうとう暁が来たのだと信じて、僕は勉強しています」(「将来について」)と、将来の退園に向けて自分を鼓舞していた。その一方で、帰省などで家族や社会にふれる中で、患者、回復者に囲まれた療養所では自覚しにくい「―僕は病気である―という気持ち」(「帰省して」)に悩む姿も綴られていた。

また社会復帰を目指す子どもたちは、長期療養に馴染んだ目の前のおとなたちのふるまいについて、率直な批判を行った。これらは、療養所にとどまらざるを得ないおとなたちと、療養所を通過点にすることを目指す中学生との対立であり、社会復帰者の増加に伴う「転換期」という状況を反映したものであった。

1960年代に入ると、おとなたちへの批判は厳しさを増す。周囲に迎合するばかりで主張をせず、長期療養に倦み噂話に明け暮れるといった厳しい指摘からは、おとなの姿に卒業後の自分を重ねて育った時代の子どもたちとは明らかに異なる、療

(122) 『青い芽』の版画のこうした特徴について、日本子どもの版画研究会研究部の山本隆一は「作品としては、情感が溢れるというよりも、むしろ、絵自体も、客観的で、写真的、事実を版に記した、「事実のドキュメント」とでもいうべきものである」とし、版画の背景を作文や詩から読み取ることで初めて版画に込められた思いが伝わってくることを「ここには、言葉と対になって表現者の思いや願い、夢を伝える、そうした方として版画があるように思える」と述べている。山本隆一「『青い芽』の版画展」に考えた版画の在り方(『子どものはなが』No.65、日本子どもの版画研究会、2021年7月) 11-12頁。

(123) 前掲、佐藤守弘「第6章 綴ることと彫ること―『北白川こども風土記』の視覚」343頁。

(124) S.Y.「さくら」(第8号、1965年) 16頁。

(125) 岡村幸宜「『青い芽』の版画展―多磨全生園の中学生が彫った『日常』の風景―」レビュー(みそにこみおでん「レビューとレポート」2021年5月25日 21:34掲載。https://note.com/misonikomi_oden/n/ne4e467622e81 最終閲覧日2021年11月21日)。レビューでは『青い芽』の版画から、作者が成長する姿をうかがえる作品群である点に注目している。

(126) この点について、世田谷美術館学芸員の塚田美紀氏より示唆をいただいた。

養所の生活への嫌悪感がうかがえる。そこでのおとなの姿は、詩の中で「わずらわしい掟」（「小鳥になりたい」）にしばられた、「みんな灰色にけむっている」「灰色にくすんでいる」（「けむり」）存在と表現され、療養所生活と、それに慣れてしまった人びとへの反発が鋭く表現されていた。

こうした批判的な精神は、自身の内面を見つめる営為から導き出されることもあった。1960年代前半の『青い芽』には、「私」「僕」をタイトルに含む文章が増えていることも示唆的である。またある少年は鬱屈した日々の思いを作文に吐露する過程で、回復後もなお続く隔離の歪みを指摘するに至った（「僕の将来」）。バレリーナを夢見た少女は、長期に及ぶ隔離の中であきらめを強いられ、具体的な将来像を描けずにいたが、実現可能性のある夢として隔離からの解放を強く求めた（「バレリーナへの夢」）。

将来像の具体化につれて、子どもたちにとっての退園は、社会人としての責任や、家族への貢献と結びついて語られるようになった（「わが道をゆく」「私の空想物語」）。おとなたちの、社会性や積極性を欠く態度は、それゆえにより強い違和感をもって批判されたのだろう。一方で、それぞれの未来への試行錯誤には悩みや困難も伴った。例えば高校進学、特に呂久高校新良田教室への進学をめぐる選択においては、早期の社会復帰を叶える条件との齟齬や、さらなる隔離を拒絶する思いがあり、ジェンダーによる将来像の違いも関わって、複雑な判断が迫られたことがうかがえる（「つらかったこの一年」）。また退園後に目指された進路には、家族との関係が大きく影響していた。場合によってはそこに、ハンセン病を罹患した自分が家族を苦しめているという罪悪感がにじむこともあった（「私の願い」）。

もうひとつ、中学生が立ち向かったのが、同情と誤解という形をとった差別であった。雑誌記者の取材を受けた少年は、発表された記事が虚偽の多い内容であったことに腹を立て、読者から寄せられる同情の手紙に文通という手段で積極的に異義を申し立てていった（「ペンフレンド」）。隔離に拘泥する療養所は、こうした子どもたちにとって最も身近な差別者であった。

このように、中学生たちは退園後の将来像を具体化しようと試み、その思索をよりどころとして、おとなの入所者、そして隔離を続ける療養所を批判的にとらえ、隔離の相対化を図っていったのである。

これらのテキストが、作者の将来や内面に向けた個人的な思索の表現であったことに対し、木版画は、「行事カレンダー」や「私たちの生活」などのテーマ名にもみられるように、「私たち」を主語として、集団の記憶を刻む表現であった。題材として、療養所との交渉の中で獲得されたダルマストーブが頻繁に用いられるなど、全生分教室という集団にとっての問題を主題としていたのである。その意味で、テキストがおとなたちのふるまいや作者個人の内面に目を凝らす中で隔離の問題点を衝いたのとは異なり、版画は隔離下の分教室の姿そのものに課題を見出し、写し取った記録といえる。自画像と、たったひとりしか中学生がいなかった第8号の版画をのぞけば、対象となった学校生活や校舎、行事はどれも子どもたちに共通のものであった。ただしそれらは、療養所の分教室という限られた場所で作られたことによって、作者に独自の表現を探るプロセスとなった。そして作り手の観察眼を磨くと共に、その成長の跡をも克明に刻んだ。

これらの版画は作文や詩に綴られた思索と合わせて、子どもたちの表現の意味をつぶさに伝えている。その証として、多磨全生園における美術教育と、それによって開花した中学生たちの表現活動が、文集『青い芽』という形態で、テキストと共に残されてきた意義は大きい。

最後に、本稿で検討できなかった1960年代後半以降の展望についてふれておきたい。分教室の運営が安定し、また新良田教室への進学とその後の社会復帰が共通の進路となってゆく過程で、子どもたちの、書くことの在り方にも変化が表れていたらしい。第12号（1972年）の編集後記で、当時補助教師を務めていた光岡良二は次のように記している。「これだけの文集を生徒たちに書かせるのがひと苦勞なことがよく分かりました」「手紙を書くより電話で済ませ、シチめんどうな活字を追うよりも映像により魅力を感じる現代の若者の

メンタリティは、どうやら彼等にも共通しているようです」[傍点原文]⁽¹²⁷⁾。療養所内外に通じる「現代の若者のメンタリティ」が、表現の質を変えたとも考えられるし、卒業後に新良田教室で4年間過ごす進路がほぼ定着した時代の中学生にとって、分教室での3年間に、書くことを通して自己の位置を見定める営みの重要性が、徐々に薄れていった可能性もある。この点は療養所内のテキストだけでなく、同時代の中学生たちの表現がどのように変化していたかを視野に入れて検討しなければならない。

一方版画における表現は、生活記録としての性格を残しながら、やはり徐々に簡潔な表現になってゆく。自画像と修学旅行先の風景を主な題材としていることから、制作の過程で思い出を共有し

ながら仲間と楽しむ、そのことに意味を見出すようになったとも考えられる⁽¹²⁸⁾。「転換期」から一足遅れて療養所を通過した子どもたちの姿は、若者たちの無気力が指摘された1970年代の世相と重なって見えなくもないが、この点も、療養所内外の状況を踏まえて読み解く必要がある。

本稿で取り上げた時期、すなわち「転換期」の表現についても、ハンセン病患者、回復者を取りまく療養所内外の変化との関係において、包括的な検討を行うことが求められる。また、同時代の療養所像を再考する試みとして、子どもに対するおとなの表現と照らし合わせて検討すること、よりミクロな視点で各作者ごとに作品を整理・分析し、それぞれの像を描くことも含め、今後の課題としたい。

(127) 光岡良二「後記」(第12号、1972年) 40頁。

(128) 第14号で、補助教師の藤田四郎は版画について、その「楽しさをみてやってください」と記している。ふじた「はながについて」(第14号、1975年) 31頁。